北海道医報　ＩＳＳＮ 0913-0217　2006.6.1. 第1053号　発行所　北海道医師会

〒060-8627 札幌市中央区大通西６丁目
TEL (011)231-1432 FAX (011)221-5070 頒価１部250円
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp

季節風

情報広報部長　藤　井　美　穂

読書習慣

ゴールデンウィーク明けに、中国に1年半駐在していた製薬会社の友人が、雑誌「臨床評価」に報告した文章を送ってくれた。そこには飛躍的な経済発展をとげている国の顔と、国際的な教育の遅れた面をもつ国の顔とが書かれていた。私も数年前に2度中国を訪れたことがある。一度は大学勤務時代に日本の学位取得を目的に中国から留学してきた産婦人科女性医師がめでたく学位を取得でき、指導者だった私が彼女の出身病院に招かれた時である。二度目は北海道の保健福祉部の仕事において友好関係にある黒竜江省の母子保健視察にいった時である。正直、おおらかではあるが、主張の強い中国からの留学生を4年間にわたり指導するにはたいへんな苦労があったし、日本人には理解できない自己主張の強さに驚いたこともあった。しかし実際に中国に行きその広さを見た時、瞬時に納得した。

当時中国には56民族12億人が生活しており、住民票のない人を含めると14億人はくだらないと説明された。街を歩くと彫りの深いハンサムな男性がロシア風の帽子をかぶり道路で豆を売っている。明らかに西域の民族であり、話す言葉は聞いたことがない言語である。私たちと同じ顔をした東洋人でも、少しずつ顔が違う。広い道路はバスも車も自転車も歩行者も一緒。よく大きな事故が起きないものだ。道路の真ん中で1人の男性が2人の女性につかまれ大きな声で罵倒されている。日曜日の朝早く大学の図書館に行き驚いたのは、7時という時間にもかかわらず、図書館の広い閲覧室には学生がびっしりで、静寂の中で勉強していることだった。机にはどの席にもペットボトルではなく、水筒が置かれている。あれだけの数の大学生がシーンとして勉強する姿は壮観だった。学生数が多く、大学を卒業しても希望の就職先がないという。いい成績で卒業して少ない大学院進学の枠を勝ち取ろうと熾烈な競争をしているという。こんな激しい競争社会の中でも、若者たちの目は輝いていたのを思い出す。そして私が指導した留学生のように確かに彼らには明確な自己主張があった。

「臨床評価」の中で友人は実際に北京のスタジアムで見たアジア・カップ決勝戦の全経過を書いていた。6万人以上も収容できるすばらしいスタジアムで繰り広げられたジーコ・ジャパンの勝利に対するブーイングと会場外で起きた騒動は、まだ記憶に新しい。彼は『・・・今回の原因は、中国では「団体スポーツ」を経験している人が少ないと言う事でした。・・・学校の授業で団体スポーツをすることにより、多くのことを学んだ事に気がつきました。勝ってうれしい・負けて悔しい・負けても勝った相手に敬意を表する・負けた者へのいたわりなどがそうだと思います。今まで考えた事もないことでした。・・・外国の文化を知っている人や、接する機会のある人は「恥ずかしい事」であるとも思っているようで、この話はもう触れる事はできませんでした。・・・』と書いている。

今年のゴールデンウィークは1週間ぶっ通しで産業医の申請資格50単位・集中講義を受けた。30年ぶりの階段教室での授業、午前2講、午後2講、出席カード付きである。集中が切れると「内職」をしたり、気持ちよい睡魔の支配するままといった学生時代の習慣が復活した。講義が終われば食べて寝るだけ、当直もない。携帯での呼び出しもない。普段読めない本をずいぶん読んだ。今回は教育問題と格差社会、日本人の将来の選択など、社会学系のテーマについて読みあさった。

友人がスケッチした中国の発展は日本人にとっては「いつか来た道」である。この道の30年後に、今の日本がある。アイデンティティと社会目標の希薄さが広がっていると感じる。日本の高度成長時代を作り上げてきた団塊の世代のリタイアがもたらす功罪は確実に社会のすべてのフィールドで降り掛かってくる。医療界も例外ではない。多様化する価値観の中で育ってきた次世代ではあるが、彼ら彼女らが受けてきた日本の教育に期待して彼ら彼女らと力を合わせていくべきだと、久々に過酷な勤務医生活から離れて考えた休みだった。

この印刷物は古紙配合率100％の再生紙を使用しています。